

作業は生きる力の源

～脳膿瘍後に病院職員として社会復帰を果たした元エステティシヤンの一例～

○河本 仁美¹⁾,

1) 藤井政雄記念病院 リハビリテーション室

Keywords: 作業活動, 生きる力, 社会復帰

【はじめに】

今回、脳膿瘍により高次脳機能障害及び右不全麻痺を呈した症例の外来リハビリを担当した。保有する資格を活かした作業活動を導入した結果、就労への意欲を高め社会復帰を果たせたので、支援の経過を報告する。

【倫理的配慮】

対象者に本発表の目的、方法、参加は自由意志で拒否による不利益はないこと、及び個人情報の保護について文書と口頭で説明を行ない、書面にて同意を得た。

【症例】

50代女性。右利き。都内で美容系の会社経営、美容に係る資格を多数取得。202X年 左前頭葉脳膿瘍を発症、ドレナージ術を受けるも右不全麻痺とブローカ失語、高次脳機能障害が残存、前医でリハビリ開始。ウェルニッケ脳症、DVTを併発。202X+1年 同院退院後、帰鳥し母・姉と同居、外来リハビリ希望し当院初診。会話可能、従命可能も活気なし、BRS IV-V-V、握力測定不能。杖歩行可能だが、意欲低下と高次脳機能障害（記憶・注意・遂行）のためADL全般要介助。週1回外来リハ(PT/OT)、週2回訪問リハ(PT)利用開始。

【介入経過】

202X+1年 8ヵ月に担当引継ぎ週1回の介入開始。当初は通院の負担で不調となり介入困難なことが多かった。次第に体力回復した202X+2年に障害福祉サービス開始時本人・家人を交え支援者会議を開催。積極的に自分の意見を述べ社会参加への意欲の表出あり。会議に疲労感なく参加し、馴染みのある興味の高い活動には意欲的に取り組めると判断。病前に取得したネイリストの資格に着目し、翌週より症例がOTRへ指導するスタイルでネイルアートを開始。専門知識や自身の経験を生き生きと語りつつ丁寧に作業される。1～2時間以上の作業が継続でき、手掌～手指の感覚鈍麻は持続も指先の細かな作業も可能となる。握力も10kg以上へ改善、爪切りやペットボトルの開栓も可能となり、炊事にも自ら取り組む。入浴以外のADL動作も自立した。一方、作業所での単純作業になじめず、作業所変更。週1回の外来リハでは本人の保有する資格を活かせるリハビリを継続。202X+2年 4ヵ月からはアーティフィシャルフラワーを開始。通院患者や家族を対象に教室を開催し成功を収める。202X+2年 6ヵ月にエステティシヤン・アロマセラピーを活かしアロマハンドマッサージを開始。折しも当院で患者サービスとしてアロマセラピーを検討中であり、リハビリ助手として採用の提案あり。202X+2年 9ヵ月入職、家人の送迎で週2回半日勤務。入院患者・家族への施術が好評を博している。

【結果・考察】

今回、病前は有資格者として高いスキルを活かした仕事を長年行ってきた症例が、脳膿瘍の後遺症により失職し不活発で無為な生活を送るも、そのスキルを活かし病院職員として再就労を果たすまでの経過を支援した。『もう一度資格を活かし就労したい』という明確な希望の表出から、実現可能な馴染みの活動をリハビリに取り入れ、作業自体を楽しむ中で症例の主体性を引き出していった。次第に自己目標設定が可能となり、活動量が増加したことで、体力増進、自発性の向上に繋がった。社会参加への自信が高まった好機にアーティフィシャルフラワー教室を通じ他者と交流する機会を得たことで、就労に向け自身ができる様々な活動へ更に積極的に取り組むようになった。尾川らは「自身が重要としている目標を達成することで主観的な改善につながり、心理機能が改善する」と述べている。社会復帰という目標の達成にむけ、症例のアイデンティティとなる作業に着目したりハビリに切り替え成功体験を重ねたことが、生きる力を引き出す契機となったと考える。

どの人も人生における重要な作業活動を有している。その作業を如何に楽しみながら行えるかがその人らしい生き方に繋がる。この点を重視しながら今後も介入していきたい。